

セリーヌ作『夜の果てへの旅』と『北回帰線』

本田 康 典

(一) ヘンリー・ミラーはいつ、どこで『夜の果てへの旅』を読んだのか？

(二) ミラーが『夜の果てへの旅』を読んだ経緯、出版社の所在地と『北回帰線』、アナイス・ニンの感想など

(三) ミラーはセリーヌの反応をどのように受け止めたのか。

(四) セリーヌの『北回帰線』におよぼした影響

(五) ミラーの作品とセリーヌの作品を比較した『北回帰線』の登場人物

(一) ヘンリー・ミラーはいつ、どこで『夜の果てへの旅』を読んだのか？

ブラッサイの著書『等身大のヘンリー・ミラー』(一九七五)によれば、ヘンリー・ミラーがルイ・フェルディナン・セリーヌ(一八九四—一九六二)の『夜の果てへの旅』(一九三二)を読了したのは、同書が出版される以前のことであり、ミラーとベルレスがクリシーのアナトール・フランス通り四番地のアパルトマンに移り住む以前であつ

たという。つまり、一九三二年三月下旬よりも以前にミラーは、『夜の果てへの旅』を通読したことになるが、この作品はまだ出版されていなかった。

一九六七年九月某日、パリのレストランでホキ徳田を同伴のミラーは、ブラッサイとおしゃべりを楽しみ、『北回帰線』でさえセリーヌの影響を受けた。辞書の助けを借りて『夜の果てへの旅』を読むのに一週間を要したよ。で、読んだ場所を知っているかい？ フォリー・ベルジュールの隣のホテルだよ、ある思いやりのある友人のおかげでそこに宿泊できた。そのミュージック・ホールの芸人入り口の隣にあるビストロでも時おり読み継いだ。そこは(ヘカフェ・)オ・ランデヴ・マシニストだったと思う。『夜の果てへの旅』が『北回帰線』の拠りどころではないのは明らかだが、ある箇所では、たしかにセリーヌはほくに影響をおよぼした。とりわけ、セリーヌの話しことばの使い方には強烈な刺激をうけたな」と語った。アナトール・フランス通りのアパルトマンに移る以前のミラーはまだ住所不定であり、「ある思いやりのある友人」とおぼしき人物がアナイス・ニンである。ミラーとセリーヌの出世作の共通点は俗語や卑語の頻用であり、この点については、ミラー自身もアナイス・ニンも認めているが、両者の作品を読んだ一般の人びとも同じような感想を抱くだろう。しかし、「ある

箇所では、たしかにセリーヌはほくに影響をおよぼした」と作家自身が述べているにもかかわらず、「ある箇所」が『北回帰線』のどの部分を指すのか特定されることがない。

一九三二年二月下旬の土曜日にアナイス・ニンに宛てて書かれたミラーの手紙のなかに、「近ごろ、みずほらしくて人目をひかないレストランばかりわたり歩いていましたが、いい店を見つけました——料理はまずいが、愉快な連中が集まる店です。フォォー・ベルジェールの楽屋口わきにあつて、ロシア人の友人プリンス——という男と、以前そこへ殺虫剤を届けたものでした。この男の父親が戦艦ポチョムキン の提督でした。日が落ちてからのシテ・ソルニエ通りは多くの好きな街路のひとつです」とあり、書簡集の注記によれば、「いい店」というのは、「ソルニエ通りのカフェ・オ・ランデヴ・マシニスト」である。同年二月下旬に道具方のたまり場のようなカフェでも、ミラーは『夜の果てへの旅』のタイプ稿を読み継いでいたはずであるが、どういうわけか、セリーヌのタイプ稿の件をアナイス・ニンに打ち明けていない。同書の出版が同年十月中旬であつたから、ミラーは出版のおよそ七ヶ月あまり以前にタイプ稿を読破したことになる。それでは『夜の果てへの旅』を読破したホテルの名前を特定できるであろうか？ 手がかりは「フォォー・ベルジェールの隣のホテル」である。

『ビッグサーとヒエロニムス・ボッシュのオレンジ』（一九五七）のなかに、占星学者コンラッド・モリカン（二八八七—一九五四）から、パリで母親と娘らしいふたり連れを尾行した話を聞かされるくだりが出てくる。ふたり連れはフォォー・ベルジェール近辺にたどり着く。「ついにふたりは、あるホテルに到着する。いささかどぎつい名前のホテルだ。（ほくがこう言うのは、ホテルの名前を記憶しているからだ。かつてほくはこのホテルで一週間を、その大半をベッドのなかで過ごした。この一週間、仰向けになって、セリーヌの『夜の果てへの旅』を読んだ）」。この「いささかどぎつい名前のホテル」というのは、フォォー・ベルジェールが所在するトレヴィス通りの四四番地に位置するグラン・オテル・ド・ラヴァンであろう。キューバの首都の名称を冠した、部屋数五十四（二〇〇一年現在、三ツ星）のホテルは、三〇年代にあつてむさくるしい安ホテルであつた。

一九三四年五月十二日、このグラン・オテル・ド・ラヴァンにおよそ二年ぶりに宿泊したミラーは、シュネロック宛てに手紙を書き、「今夜、ジャバウオツキー・クロンスタットのところを離れるときに、彼が提供しようとするステュディオ付きアパートを受け入れるべきかどうか思案していました——しばらくのあいだきみを宿泊させるために！」と、クロンスタットこと実名ローエンフェルズから快適なアパートを格安で借りないかという申し出があつたことを明らかにしている。サンルーム、バス、スチーム暖房などの設備付きのアパートが月額七百フランであり、アメリカの基準から言えば、ばかばかしいほどの家賃であつて、ミラーが宿泊しているグラン・オテル・ド・ラヴァンのレートのおよそ二倍であるという。「おかしいことに、ほくはこの臭い、壊れた家具等々。騒音さえも！ というのも、想像しうるものともにぎやかな地域を選んだからだ——ラファイエット通り、シカゴ・トリビューン、フォォー・ベルジェールからほんの一ブロックの距離だ。ほくは匂い、ざわめき、汗、ほこりを好む」。フォォー・ベルジェー

ル界限は、ミラーにとつていくつかの思い出が詰まっている地区であり、そのひとつが『夜の果てへの旅』を読了した安ホテルであったようである。

この手紙によれば、クロンスタットが提供しようとした住宅は、かつてマイケル・フランケルが住んでいたアパルトマンであつて、袋小路ヴィラ・スーラに所在していた。(四ヵ月後の同年九月二十三日、『北回帰線』が出版された日に、ミラーのヴィラ・スーラ一八番地への転居が実現する。)翌五月十三日、ミラーはオテル・ド・ラヴァンの近くのカフェで手紙を書き継ぎ、「いま『北回帰線』をふたたび書き直している」と述べつつ、「それから、いつものように、削除している。無駄なのは取り除いて、新しいのを挿入している」と、推敲が最終段階にあることをほめかしている。グラン・オテル・ド・ラヴァンに宿泊していたミラーは、『北回帰線』のなかに見出される『夜の果てへの旅』の影響や痕跡を確認していたのではあるまいか。

(一) ミラーが『夜の果てへの旅』を読んだ経緯、出版
社の所在地と『北回帰線』、アナイス・ニンの感
想など

ブラッサイは、著書『等身大のヘンリー・ミラー』の「セリーヌとミラーについてのささやかな対話」と称するくだりにおいて、フランク・ドボとふたりの作家について語りあつてゐる。

フランク・ドボ…ある日、(ロベール・ドゥノエルに会いに行つた。活動的で野心的な新興出版社の重役のひとつだ。ドゥノエルがこう言うのだ。「ぼくは傑作を発見したよ！ 著者が天才であるのは疑いの余地がない。先日、だれかがぼくの机の上に膨大な原稿を置いていったが、その原稿がぼくの好奇心をそそるんだな。持ち帰ることに決めて、劇場から帰宅する途中でページをさつとめくり始めたら、とりこになつてしまつた……目をなせなくなつた。徹夜で読んだよ。(中略)これは小説なんかではなく、棍棒の一撃、爆薬、爆弾……」。それからドゥノエルは三晩も寝ずに読み続けたとわたしに言つた……」最後までぼくの興味と熱狂ぶりは薄れなかつた……」。そこでわたしも一読したが、圧倒されたね。ヘンリー・ミラーを含めて数名の友人たちに見せたよ……原稿にまつわる話はもう探偵小説そっくりだ。

ブラッサイ…著者の名前をだれも知らなかつたんじゃないかね？ 社員たちに聞いたたら、ある女性が原稿を持ち込んだのが判つたとか。

だれが『夜の果てへの旅』の原稿をドゥノエル社に持ち込んだかについては、いくつかの異なる説明があり、その後の経緯についても錯綜するところもあるので、フランク・ドボは探偵小説もどきであると思つたようである。当時は異稿が十も存在してゐて、フランク・ドボがいくつかを預かつてゐた。ともあれ、ミラーは一九三二年二月下旬に原稿を読み、ドボに宛てて二月から手紙を書くようになった。フレデリック・ヴィトウーの『セリーヌ伝』によれば、原稿はガリマール

社にも持ち込まれたが、ドウノエルのほうが出版を四月に決定し、六月に契約を結んだ。ミラーは『夜の果てへの旅』を刊行する出版社が決まる前に、フランク・ドボの手元にある原稿のひとつを読んだのである。フランク・ドボの記憶によれば、『夜の果てへの旅』の原稿をミラーに手渡したのは、あるパーティでミラーと知り合つて二、三ヶ月後のことであるが、ミラーがパーティで手あたり次第に料理や飲み物に手を出していたという。「ヘンリーはセリーヌと兄弟的絆を感じとり、『夜の果てへの旅』と自分の小説との結びつきには意味深いものがあると感じていた」と、フランク・ドボはブラッサイに説明した。

「セリーヌに会つたのか」とブラッサイに質問されたフランク・ドボは、「もちろんさ、初めてセリーヌに会つたのは、エコー・ミラテール陸軍士官学校と廃兵院の近くの、アメリカ通りという狭い街路にある出版社だ。そのあとセリーヌはうちの会社にひんばんに来たよ。『夜の果てへの旅』の版權を外国に売りたい気持ちがあつたからね」と応答した。アメリカ通りに所在していたのはドウノエルの出版社である。当時のフランク・ドボは、ポール・ウインクラー著作權代理店に勤務していたので、著作權を外国に売りたい作家たちと交流する機会があつた。彼はフランスの作家ではセリーヌの他にレーモン・クノー（一九〇三—七六）と親交があつた。

ところでパリにはおよそ五千の街路が存在し、パリを踏査したミラーは、『北回帰線』において言及されるべき街路については吟味していたのではあるまいか。それぞれの街路は語り手の思い出や記憶と固く結びついているはずである。『北回帰線』に、「アメリカ通りはほくのお気に入りの街路のひとつであり、幸運にも市当局が舗装するのを

忘れてしまった街路でもある。大きな玉石が道路の片側から向かい側まででこぼこに広がっている。わずか一ブロックの長さで幅が狭い。オテル・プレティはこの通りにある。アメリカ通りには教会もある。まるでフランス共和国の大統領とその家族のために建てられたようなおもむきだ。じみで小さな教会をたまに見るのもわるくない」とあるが、この街路が『夜の果てへの旅』を世に送り出した出版社と脈絡するのを意識しながら書き込んだことになるだろう。

ミラーが『北回帰線』の初稿を書き上げた一九三二年十月中旬に、『夜の果てへの旅』がドウノエル社から出版された。フランスで十紙を越える新聞がこの作品の梗概を載せるなど、注目を集め、ゴンクール賞の候補作に挙げられたりして話題になつた。

当初の契約では『北回帰線』は一九三三年二月末に出版されることになつてしたが、資金の目途が立たなかつたので、オペリス・プレスの社主ジャック・カハーンは出版を延期した。ミラーは『北回帰線』の改稿作業に入つたが、しばしばアナイス・ニンに感想なり意見を求めることになつた。一九三三年五月になると、アナイス・ニンは『北回帰線』と『夜の果てへの旅』との「親縁性」に留意するようになった。ミラー宛ての、同年五月三日付けの手紙には、「わたしは『夜の果てへの旅』について述べたことを取り消します。あなたは六月にはこの作品を読まなければならぬでしょう。この作品とあなたの作品とは親縁性があります」とあり、ニンはミラーがとうに『夜の果てへの旅』を読了したことにまだ気づいていなかった。同月八日付けの手紙でも、「あなたにはセリーヌと多くの類似点があります。ベルナー・ステイールはあなたの作品が大いに好きになるはずですよ。来週

の火曜にやって来ます」とあるので、アナイス・ニンはドゥノエルの共同経営者であったステイールを相手に、『北回帰線』と『夜の果てへの旅』との「親縁性」について話題にしたのではあるまいか。翌九日にもミラーに宛てて、ニンは手紙を書き、出版代理人ウィリアム・ブラッドリーに会って、ミラーについて話題にしたことを述べている。「彼はあなたについてすばらしいことを言いました。出来ばえがよい箇所では、あなたを凌駕するのは不可能だ。彼はあなたの力量を大いに信じ、あなたが詩人であると信じているのです」。ブラッドリーがミラーを高く評価したので、「世間が『夜の果てへの旅』を許容できるのであれば、人びとは（作品の）言語を引き合いに出しながら、ミラーの作品も受け入れるでしょう」と、ニンが意見を述べると、ブラッドリーは「ミラーのほうがセリーヌよりもはるかに卓越した知性をもつ人物だ」と、彼の見解を表明したという。いずれにせよ、『北回帰線』に手を入れている段階で、ようやくアナイス・ニンは『北回帰線』との関連において『夜の果てへの旅』を意識するようになった。ミラーは、『北回帰線』が出版されると、すぐに手紙を添えて一部をセリーヌに進呈した。

(三) ミラーはセリーヌの反応をどのように受け止めたのか。

ブラッサイとフランク・ドボの対話から。ブラッサイが「ヘンリーはセリーヌに会ったのか？」という質問を投げかけると、ドボは次の

ように返答した。

いや、残念ながら、会えなかった。『夜の果てへの旅』の作者に紹介すれば、ミラーは喜ぶだろうから、出会いの場をもうけよう、あらゆる手を尽くしたが、セリーヌは疑い深く、人間嫌いだね。とりわけセリーヌは知識人や文人、その他の同類を嫌っていた。ミラーは彼の大嫌いなタイプなんかではない、とセリーヌを説得しようとしたが、無理だった。セリーヌには被害妄想があった。だれもが自分を困らせようとし、自分から盗み、自分を利用しようとしている、と思い込んでいた。とくに自分の本を扱う出版社や出版代理人もそうだと信じ込んでいた！ あらゆる努力を払ったが、セリーヌとミラーの顔合わせは実現できなかった。忘れてならないのは、セリーヌにとって、ミラーはまったく未知の人間だということだ。

ブラッサイはさらに問いを発した、「なぜセリーヌに『北回帰線』の原稿を見せなかったのか」と。「原稿が手元になかったからね。出版されてから一冊を送ったよ。セリーヌは英語がよくできたから、『北回帰線』を読んでくれたし、評価してくれた……だが詳細に意見を述べようとはしなかった」。ミラーも『北回帰線』をセリーヌに送ったと述べているが、おそらくフランク・ドボを介して送ったのであり、セリーヌの返信もフランク・ドボ経由で受け取ったのであろう。当然ながら、ミラーはセリーヌが人間嫌いであることをフランク・ドボから聞き知っていたはずである。

ブラッサイの著書によれば、ミラーは若い劇作家ジャック・クラインの弟ロジェ・クラインに宛てて、セリーヌから受け取った手紙を書き写し、彼の意見を求める手紙を書き送ったという。一九三四年の秋のことである。

親愛なるロジェ、セリーヌに手紙を添えて『北回帰線』を送ったら、すぐに短い返事が来ました。大いに興味をもって多くの本を読むつもりだと言っている。ちよつと目を向けただけで彼の好奇心をそそったようだ。それから彼はいささか多くの理解できないことを書いてきた。きみのために引用してみよう。もし意味合いがわかれば、すぐに知らせてくれないか。好奇心でうずうずしている。セリーヌの手紙を丸ごと書き写します。

わたしの同僚へ…

きみの『北回帰線』を読んだら、ひじょうに楽しい思いをすることでしよう。すでに読み終えた部分だけでも小生の興味をそそり、すべてを読むという気にさせてくれます。小生のかなりよく承知していることについて、ほんの少し助言させていたいただきたい。充分に慎重であつてください！ つねに、もつと慎重に！ 自分が間違っているのだと学んでください——この世は自分が正しいと思っている人たちが溢れています——そういうわけでこの世は胸をむかつかせるのです。

敬具

L・F・セリーヌ

ぼくが理解できないのは、傍点の箇所だ。末尾の「胸をむかつかせる」というのは、悲嘆に暮れるという意味だろうか。「慎重であれ」ということで彼はなにを言おうとしたのだろうか？ にかぼくを咎めているのだろうか？

取り急ぎ。

ヘンリー

ブラッサイは、ミラーの質問にロジェがどのように応答したかは知らないと述べたあとで、セリーヌがおのれの実人生において、『夜の果てへの旅』においても、「自分が間違っていることを学べ」とばかりに、自身を悲惨な状況に追い込んでいったと解説し、「自分が間違っていることを学べ」とはセリーヌの内奥をうかがわせる言い回しであると主張している。ブラッサイの主張はそれなりに確信にみちていて説得力もある。問題は、ミラーがセリーヌの手紙をどう受け止めたかである。

『セリーヌ伝』の作者フレデリック・ヴァイトゥーは、ミラー宛ての返信においてセリーヌが「自分自身について語り、口うるさく教訓を垂れる連中からこれまでになく遠く離れていたいという自分の気持ちを表明している」と解釈し、セリーヌの返信は、「接触する気がまったくないことをヘンリー・ミラーに暗示するための彼なりの手口だった」のではないかと推測する。『北回帰線』の著者は、それからは彼に何も言わなかった。セリーヌの返事を会いたくない意思の表れと判断したのだ」と書いている。ヴァイトゥーの説明は、突っ込みがやや不足していて、なんとなく物足りない感じがする。

一九五一年六月二十六日付けの、イギリスの画家グラハム・アクロイドに宛てた返信のなかで、ミラーはマックス・エルンストやセリーヌの住所を知らないと書いてから、「ぼくは一度だけセリーヌに手紙を書きましたが、彼があまりにもいたましく、哀れだったから、もう彼をうるさがる気になれません」と括弧にして追記した。ミラーはセリーヌの返信やフランク・ドボのもとらす情報から総合的に判断し、セリーヌをそつとしておきたいと思つたのである。一九五〇年、パリ法廷は、ナチに対する協力戦犯として、セリーヌに国籍剥奪、資産没収等の判決を言い渡して、ミラーもこれをニュースとして知つていたとすれば、セリーヌをいっそう哀れに思つていただろう。

(四) セリーヌの『北回帰線』におよぼした影響

『北回帰線』がマンハッタンのグロブ・プレスから出版されて満一ヶ月も経過してない一九六一年七月一日、セリーヌは脳出血で逝つた。反ユダヤ主義者の烙印を押され、毀誉褒貶きよほうへんの渦に巻き込まれていたセリーヌであつたが、一九六三年になつてようやく『レルヌ』誌(セリーヌ特集号)が刊行された。およそ三百五十ページの『レルヌ』誌に多士済々が寄稿し、セリーヌについて賛否の激論を展開している。アメリカ人の論者はエズラ・パウンド、ジャック・ケルアック、ヘンリー・ミラーの三名である。

寄稿文の、最後のパラグラフにおいてケルアックは次のように言う。「セリーヌは、偉大な、きわめて偉大な魅力と知性をもった作家であつ

たし、いま彼に匹敵する作家はいない。セリーヌは、ついでながら、ヘンリー・ミラーの作品に大きな影響をあたえている」とし、「恐怖のしかかる肩からつまらぬものを払い落とそうとする、あの現代的な炎のごとき語調、あの誠実な苦悩、欠点を補うような哄笑と肩をすくめること」などがミラーにとって迫真的であつたのであり、「現代の政治的危機は一八二二年のトルコの危機と同様に重要ではなく、当時のウィリアム・ブレイクは神の子羊について書いていた。結局のところ、人びとは神の子羊を記憶するだけだろう」と、ケルアックは述べたあとで、彼がセリーヌについて記憶するのは、主人公にして語り手フェルディナン・バルタミュの友人レオン・ロバンソンだけだという。「ぼくは例の医師が夜明けのセリーヌ川で放尿しているのを思い起こすだけである……ぼく自身は元船乗りにすぎず、政治には関係がなく、投票もしない。アディーユ、哀れに悩める、わが医師よ」。ケルアックは医師であつたセリーヌにまつわる政治的発言や政治的取り扱いを夾雑物として排除し、医師セリーヌに共感を示しながら、別れの挨拶を送っている。

『レルヌ』誌に寄せたミラーの文章は、追悼文とは言いがたく、一九六二年十月一日付けの、『レルヌ』誌の編集者に宛てた断り状である。当時のミラーはドイツ国内を旅行していたから、旅先から『レルヌ』誌に手紙を書き送つた。

問題は、旅行中になにか価値あるものを書くだけのこころの冷静さをたもてないことです——それにわたしはここ数か月間も大いに旅行をしているのです。わたしに提案できるのは、わたしは

これまでセリーヌに関して書いたものを利用することです。ニュー・ダイレクションズがお役に立てるかもしれません。できれば、ヘンリー・ミラー文芸協会の幹事トマス・ムア氏がお役に立てましょう——ミネソタ州ミネアポリス、北七番通り二二一番地。彼は最近になってわたしのすべての本を調べました。わたしはどこに何が載っているのかさっぱりわかりません。わたしはセリーヌの作品を激賞しますし、彼に負うところも大いにあります。わたしはこうした「死後の検証」に対して何も書かなくても恥ずかしいとは思いません。生存中のセリーヌのためにできることはしたのです。彼が逝ってしまったいま、こうしたことばにどれだけの意味があるのでしょうか？ 人びとは発言するのです——生者のために。彼の作品に引寄せられる人びとは、これからもそうするでしょう、いま彼が賛辞を述べられようと、どうであろうとも。そう思いませんか？（あなたはそうは思わないだろうと推察しますが）。ともあれ、こうしたことは、わたしに葬儀を墓の脇に立って、うつろな穴に花を投げ込んだりするのを思い起こさせるのです。わたしに絶対にできないことです。わたしは葬儀にも結婚式にも出かけません。

このように長たらしい説明をどうかお許しください。セリーヌはいまなおわたしのなかにいて、これからもつねにそうなのです。

敬具

ヘンリー・ミラー

『レルヌ』誌の編集者は、ミラーの断り状を独自の判断で追悼文と

みなし、同誌に掲載した。ミラーの文章のポイントはどこにあるのか？ 末尾の「セリーヌはいまなおわたしのなかにいて、これからもつねにそうなのです」ということになる。前述したように、ミラーは『北回帰線』を執筆しているさなかに『夜の果てへの旅』のタイプ稿をやるように読み、のちにブラッサイに『北回帰線』の「ある箇所では、たしかにセリーヌはほくに影響をおよぼした」と述べた。『北回帰線』はミラーにとつて、おのれ自身と等価である。つまり、『レルヌ』誌に掲載されたミラーの文章の末尾を、「セリーヌはいまなお『北回帰線』のなかにいて、それゆえに、これからもつねにそうである」と読み替えることができる。ところで、『夜の果てへの旅』が『北回帰線』以外の作品においても反響しているだろうか。どこで、どのように反響しているのか？

セリーヌの分身である『夜の果てへの旅』の主人公バルダミュは、戦場、アフリカ、アメリカを駆け抜けてパリに帰還する。一九三五年に一月に五年ぶりで一時帰国したミラーは、書簡形式のエッセイ『ニューヨーク往還』（一九三五）のなかで「壁がのしかかってくる。（中略）壁はむきだしで、摩天楼ときたら、立っている鉄道線路のようだ」と書き込んだが、この部分は『夜の果てへの旅』のなかでバルタミュの述べている、「垂直に立っている都市」（ニューヨーク）と「寝そべっている都市」（パリ）という差異を読者に連想させる。以下の引用は、ミラーの記憶に突き刺さったセリーヌのニューヨークの描写である。

想像してみたまえ。そいつが立っていたのだ、やつらの都市が、まぎれもなく垂直に。ニューヨーク、それは立っている都市だ。

もちろん、もうずいぶんと見てきた、ぼくたちだって、都市をもつと美しいのも、港も、有名なやつだって。だが、ぼくたちのところでは、そいつは寝そべっている。そうだろう、都市というのは、海辺に、川のほとりに、風景のなかに身を横たえて旅人を待つているのだ。

ミラーはバルダミュのアメリカ滞在のくだりをていねいに読了した。一九四〇年一月にギリシア経由で帰国したミラーは、同年秋にアメリカ紀行を執筆するためにアメリカ一周旅行の途についた。アメリカ紀行『冷房装置の悪夢』（一九四五）によれば、ミラーはデトロイトに到着したときに、自動車王ヘンリー・フォードを表敬訪問しようと思うが、そのときにデトロイトに滞在したセリーヌを思い起こす。

ぼくはセリーヌのことを思う——彼はいかにも愛情をこめてフェルディナンと自称している。そうだ、工場の門の外に立っているセリーヌのことを思うのだ。（夜の果てへの旅）の二二二ページから二二五ページだったと思う）彼は職を見つめるだろうか。きつと見つけるだろう。彼は職にありつく。彼は洗礼をくぐりぬける——騒音による屈辱の洗礼だ、彼はあそこで数ページにわたって機械についてのすばらしい歌をうたう。機械が人類にふりまく恩恵をうたう。やがて彼はモリーに出あう。モリーは売春婦にすぎない。『ユリシーズ』にも別のモリーがいるが、デトロイトの娼婦であるモリーのほうが、ずっと立派だ。モリーには魂がある。（中略）モリーは、人びとがどう考えようと、フォード氏

の巨大な企業よりも大きく神々しく浮上する。セリーヌがデトロイトを描いた章において、みごとであり、驚くべきことだ——彼が機械の魂に対して娼婦の肉体に軍配を上げているのは。

ミラーは、バルダミュの心底からの、娼婦との交流に共感を示し、セリーヌを高く評価する。社会の除け者たちに寄り添うことにおいて、ミラーはエジプト作家アルベール・コスリー（一九一三—二〇〇八）に深く共感したように、セリーヌとの血縁的絆を確認しようとする。一九五四年、ミラーはアメリカ旅行の備忘録『赤いノートブック』（手書き、写真版）を刊行したが、最後のページにはセリーヌの写真が貼り付けられている。さて課題は、「セリーヌはいまなおわたしのなかにいて、これからもつねにそうなのです」と断言するミラーを、『北回歸線』において確認できるか、どうかである。

バルダミュ、ロバンソン、マドロン、ソフィの四名がタクシーに乗り込み、セリーヌ通りを通過すると、いさかいになり、マドロンがピストルでロバンソンの腹部に二発をぶちこむ。バルダミュを襲うのは圧倒的な喪失感だ。バルダミュはセリーヌ川に向かって急勾配の小道を歩む。ロバンソンを運ぶ担架が遠ざかっていく。平底船が岸辺にしっかりと繋がれている。今日のセリーヌ川では平底船は激減しているようであるが、一九三〇年代には貨物を運搬する平底船の往来が目立っていた。セリーヌ川はパリの大動脈であり、セリーヌを往来する夥しい平底船は、歴史的には交易の要の役割を果たしてきた。

かなたの海を眺めても、もはや想像力が働かないバルダミュ。「ぼくの放浪、そいつはもうおしまいだ。他のやつらの番だ！……・世界

はもう一度閉ざされてしまったのだ！果てまで来ちまったのだ、ぼくたちは！友人ロバンソンの死とともにバルダミュの旅は終結する。「ぼくは人生でロバンソンほど遠くまで行き着いてもいなかった！……結局、成功しなかったのだ！やつが痛めつけられる目的で身につけたような、頑としてゆるがぬひとつの思想を、ぼくはついに獲得できなかった」。夜明けのセーヌ河岸は白み、活気づき、「労働が始まる」。末尾でバルダミュの最終的な喪失感が綴られる。

遠くで引き船が汽笛を鳴らした。その合図の響きは橋を越え、次々と橋弧を、水門を、橋を越え、遠く、さらに遠くのびていく……川のすべての平底船を、一隻のこらず、さらにパリ全体を、空を、野原を、そしてぼくらを、すべてを、それはさらっていった。セーヌ川をも、すべてはもう消えてしまった。

『夜の果てへの旅』の末尾が『北回帰線』のミラーに迫った。セリーヌの作品に共感しつつも、パリに移り住み、「パリの本」を書き上げようとしていたミラーは、セーヌに浮かぶ無数の平底船やパリを丸ごと、引き船の「汽笛」によって消滅させようとするセリーヌの想像方に驚嘆し、圧倒されつつも、この末尾のパラグラフをどうあっても許容できないと思ったのではなからうか。ここで想起されるのは、ミラーがアナイス・ニンに宛てた一九三三年二月の手紙のなかで、サミュエル・パトナムのラブレター伝から引用してみせた「さまざま変化にもかかわらず、パリはつねに同じままである」という一節である。この一文を読んで「パトナムに先を越されました」とミラーがアナイス・

ニンに伝えたのは、『夜の果てへの旅』に対するアンチテーゼとして、『北回帰線』の結末あたりにおいて「パリはつねに同じままである」という趣旨をすでに書き込んでいたか、あるいは書き込む予定であったからである。「パリの本」を執筆しているさなかに『夜の果てへの旅』のタイプ稿を読んだミラーは、この作品の末尾を押し戻して、平底船を、セーヌ川を、パリをおのれの作品において奪還せねばならない、と決意したはずである。つまり、『夜の果てへの旅』の末尾が、『北回帰線』の結末を決定づけることになる。

妊娠したと偽って結婚を迫るフランス女性ジネットから解放させようと、友人フィルモアを北駅から出る列車に慌ただしく押し込むと、『北回帰線』の語り手はタクシーでセーヌ川のほうへ向かう。セリーヌの作品では、友人ロバンソンの死を契機として急転直下に結末に向かうが、『北回帰線』では友人フィルモアのパリからの逃亡をもって一気に結末にだれ込む。『北回帰線』の結末のリズムは、セリーヌのデビュー作のそれに負っている、「セーブル橋のところ降りるとぼくはセーヌ川に沿ってオートウェイエ・ヴィデユクに向かって歩き始めた。このあたりは支流くらしいの川幅で、木々が岸辺まで続いている。水を青々とたたえ、鏡のように穏やかだ、とりわけ対岸の近くは。時おり、平底船が低く音を立てて進んでいった」。ミラーはセリーヌが消去しようとした「平底船」を風景のなかに蘇えらせる。

あらゆることがぼくの頭からふるいを通って静かに落ちていくと、大いなる平安がぼくを支配した。ここでは、川が曲がりくねって帯状の丘陵を通り抜け、土壌には過去が飽和状態にまで染み込

んでいるので、いかに遠い昔日をさまよっていても、ひとはこの表土と、人間がそこで織りなす背景とを引き離すことができな
のだ。ああ、なんとということだ、黄金色の平安がかすかにゆらめ
くと、神経の鋭いひとだけが顔をそむけることを夢想できるのだ。
かくも静かにセーヌが流れていると、ひとはその存在にほとんど
気づかない。セーヌはつねにそこにある、静かに、慎み深く、人
間のからだのなかを走っている大動脈さながらに。

セーヌ川に向かい合ったミラーのところに訪れる「大いなる平安」
には、セリーヌの『夜の果てへの旅』の末尾にかかわるミラーの自己
検証という側面が絡んでいる。セリーヌが消去しようとした平底船、
セーヌ川、パリを奪還したからこそ、「大いなる平安」が小説家ミラー
を包み込む。「セーヌはつねにそこにある」と書き込んだとき、ミラー
はセーヌ川を抹消しようとしたセリーヌの悲痛な思いを痛烈に意識し
ているおのれ自身を自覚していたのであり、『レルヌ』誌の編集者に「セ
リーヌはいまなおわたしのなかにいて、これからもつねにそうなので
す」と言い放つこともできたのである。

(五) ミラーの作品とセリーヌの作品を比較した『北回 帰線』の登場人物

一九三四年十月五日、マンハッタンに滞在中のリチャード・オズボ
ン(一九〇三—七四)こと『北回帰線』のフィルモアは、オペリス

ク・プレスから出版されたばかりの同書を落手するや、すぐに読み始
めた。フィルモアがパリから逃亡する結末のエピソードから読み始め、
それから真ん中あたりへと自分が登場している場面へと目を走らせ
た。彼は夢中になって読んだ。その日のうち書かれた返信のなかに以
下の一節が含まれている。

この作品のなかの私についての描写は、予期していた以上に寛
大に扱われています。確かに私です、少なくともわが人生のあの
局面における私の一部です。描写は完全に公正なものではないに
しても、細部の事実については文学的、詩的許容が認められるで
しょうし、シユルレアリスティックな歪曲を含んでいて、必ずし
も私の内面的なものに触れていないにしても、取るに足らないこ
とです。たとえ描写されているのがいまの私ではないにしても、
みごとに性格描写です。そしてそれこそが重要なすべてです。た
しかにあの当時の私がここにたつぷりと書かれていて、いまの私
は自分自身を笑ってしまいます。しかし、そうであっても、釈放
されたことの涙と絶望のうつろな笑いを笑わずにはおれません
……迷妄のあぶくはとうに破裂したのですが、私の観点からはあ
まりにも深刻で、悲劇的でしたから、超然としてはおれなかつた
のです。ロバンソンがセリーヌの作品のために果たした役割を、
私があなたの作品のために担っているように思われます、もつと
もセリーヌよりもあなたのほうが友人である作中人物に思いやり
を示しています。

すでに述べたように、『北回帰線』の初稿（ただし、結末は未定のままの荒削りの稿であった）をオベリスク・プレスに提出した一九三二年十月に、セリーヌの『夜の果てへの旅』が出版された。ミラーは同年八月末または九月にパリから逃亡した親友リチャード・オズボーン（職業は弁護士）のエピソードを『北回帰線』の結末に繰り込むことによって、親友の喪失というセリーヌのデヴュー作との表面的「類似点」を織り込みつつ、「セリーヌはつねにそこにある」と書き込んでセリーヌに対するアンチテーゼをひそかに主張していたのである。

〈参考文献〉

- Brassat, *Henry Miller grandeur nature* (Gallimard, 1975)
- *Henry Miller, Happy Rock*, trans. Jane Mary Todd (The University of Chicago Press 2002)
- Céline, Louis-Ferdinand, *Journey to the End of the Night*; trans. Ralph Manheim (New Directions, 1983)
- 『夜の果ての旅』（生田耕作・大槻鉄男訳 中央公論社 一九六四）
- 『夜の果てへの旅』（高坂和彦訳 国書刊行会 一九八五）
- フレデリック・ヴィトウ 『セリーヌ伝』（権寧訳、水声社 一九九七）
- 本田康典 「ヘンリー・ミラーとアルベール・コスリー」(『水声通信』

第二八号、水声社 二〇〇九)

- Miller, Henry, *Big Sur and the Oranges of Hieronymus Bosch* (London, Heinemann 1958)
- *Letters to Graham Achroyd* (McPherson Library, University of Victoria)
- *Letters to Richard Osborn* (Research Library, UCLA)
- *The Air-Conditioned Nightmare* (New Directions, 1945)
- *The Red Notebook* (Jonathan Williams Publisher, 1954)
- Osborn, Richard. *Letters to Henry Miller* (Research Library, UCLA)
- L, Herne No. 3 1963 *Louis = Ferdinand Céline* (Paris, Ed. de L, Herne)

(付記) 本稿は執筆中の作品(『北回帰線』物語 評伝ヘンリー・ミラー)を構成する一章として纏められたものであります。他誌において掲げられた参考文献は原則として省略し、本稿において新たに参照した参考文献が挙げられています。

Céline's *Journey to the End of the Night* and *Tropic of Cancer*

HONDA Yasunori

This paper aims at tracing the following points of the two controversial novels — Louis-Ferdinand Céline's *Journey to the End of the Night* (1932) and Henry Miller's *Tropic of Cancer* (1934).

- (1) When and where did Henry Miller read Céline's *Journey to the End of the Night* ?
- (2) How did Miller come across *Journey to the End of the Night* ? Is the location of the publishing house which released Céline's book depicted in *Tropic of Cancer* ?
- (3) How did Miller accept Céline's reaction to *Tropic of Cancer* ?
- (4) What was Céline's influence on *Tropic of Cancer* ?
- (5) How did Richard Osborn, who is the model for Filmore of *Tropic of Cancer*, compare himself with Robinson, the hero-narrator's buddy of *Journey to the end of the Night* ?